

## 研究報告

土着天敵タバコカスミカメをナスの周年栽培体系で  
利用する技術の開発徳島県立農林水産総合技術支援センター <sup>なか</sup> 中 <sup>の</sup> 野 <sup>あき</sup> 昭 <sup>お</sup> 雄

## はじめに

徳島県内では露地ナスが約 90 ha、施設ナスが約 20 ha 栽培されている。吉野川中流域の阿波市や吉野川市では両体系を栽培する生産者もみられる。両体系は栽培始期と終期が重なる。つまり、露地栽培終期の 8～9 月ごろに、施設栽培が始まり、施設栽培終期の 5 月ごろには露地栽培が始まる。両栽培期間中にはアブラムシ類やハダニ類等様々な害虫が発生し、葉や果実等を加害する。なかでも、侵入害虫のミナミキイロアザミウマは果実に被害を及ぼし、生産者が最も防除に苦慮している。とりわけ、両体系を栽培する地点では栽培終期に増殖したミナミキイロアザミウマが新たな体系に移動、定着し、増殖するといった悪循環を繰り返すことになる。さらに、本種は各地で種々の薬剤に対する抵抗性を獲得し（古味, 2003; 柴尾ら, 2007）、近年では本県のキュウリ栽培地でもスピノサドに対する抵抗性が確認されている（Bao et al., 2014）。また、露地ナスでは施設ナスに近接する圃場で採集した個体群が、近接していない圃場の個体群よりも各種薬剤に対する感受性が低い傾向にあることを確認している（中野, 未発表）。

一方、本種の有力な天敵のタバコカスミカメ（以下、カスミカメ）は、2007 年 8 月に高知県香南市の野外のゴマ圃場において、餌になるような微小昆虫などがほとんどいないにもかかわらず大量に発生し、世代を繰り返していることが観察された（福井, 私信）。後に、中石ら（2011）によって、カスミカメが動物質の餌がなくてもゴマで増殖できることが明らかになった。このようなことから、高知県内では、「天敵温存ハウス」と呼ばれる遊休ハウスにゴマを植栽することでカスミカメを増殖し、それをナスなどの生産施設に導入する方法が利用されている。この方法を本県に導入する場合、適当な遊休

ハウスが産地内に見当たらないことや生産者が天敵利用に馴染んでおらず、利用するまでの機運が熟していないなどの隘路がある。そこで、「天敵温存ハウス」を利用しなくとも産地内で個々の生産者が露地ナスと施設ナスでカスミカメを周年利用できる方法を考案し、生産現場で実証したので紹介する。なお、本研究は農林水産省の委託プロジェクト研究「気候変動に対応した循環型食料生産等の確立のための技術開発」F 系、「土着天敵を有効活用した害虫防除システムの開発」の助成を受けて実施した。

I タバコカスミカメをナスの周年栽培体系で利用  
する「ゴマまわし」

この度開発した、カスミカメをナスの周年栽培体系で利用する技術を模式的に図-1に示し、解説する。太曲線矢印は露地栽培の夏秋ナスと施設栽培の冬春ナスの栽培期間を、また細曲線は天敵温存植物の栽培期間を示す。まず、露地栽培ではゴマを 5～6 月ころより 1 か月ごとにナス圃場内に植栽する（図中①細曲線）。ゴマで発生したカスミカメは増殖させ、ゴマごとナスへ移す（図中②矢印）。具体的には、ゴマの鞘が黄変しかけたこ

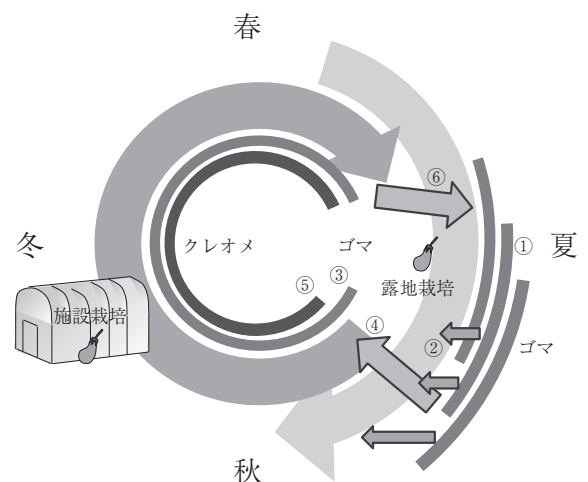


図-1 タバコカスミカメをナスの周年栽培体系で利用する「ゴマまわし」

図中の丸数字は本文中を参照。

Development of the Technique Using *Nesidiocoris tenuis* (Reuter) on the Year-round Production System of Eggplant. By Akio NAKANO

(キーワード: 土着天敵, タバコカスミカメ, ゴマ, ナス周年栽培, ゴままわし)